

見える人

1ha

小さい頃から、聡い子だと言われていた。
四歳の時にはすでに聖書を暗記し、近所の老人たちに頼まれては誦んじた。
五歳で近所のパン屋の売り上げの計算を任せられ、お礼に一日一個の飴玉をもらった。
周囲の大人たちからは神童才子と褒められた。
七歳を過ぎた頃から、大人たちの私を見る目に変化を感じるようになった。
だんだんと、怯えのようなものが混じり始めた。
老人たちは私と目を合わせなくなった。
パン屋の仕事はやんわりと断られた。
私だけでなく、私の家族たちも、徐々に周囲から避けられるようになった。

八歳のあの日。
あの時、本当はすべて見えていた。
見えていたのに、そう言わなかったのは、周囲の空気を察したからだ。
見えてはいけない。
そういう気がした。
いや、むしろ。
見えていない、ということを公言した方が良いとさえ思った。
誰のためでもない。
自分のために。
だから私は、叫んだ。
精一杯に子どもらしい無邪気さを装って。

「王様は、はだかだ！！」

周囲の大人たちのホッとした瞳。
「自分たちが王様に対して言えなかったことを、
正直な子どもが大声で指摘してくれた」
そんな安堵？
ちがう。
そうじゃない。
「この子にも見えなかった」
そのことが、大人たちを安心させた。
大人たちは私を取り囲み、談笑した。
この子も普通の子なのだ、と。
そんな大人たちの隙間から見える王様は、
顔を血のように赤らめ、怒りで震えていた。
神秘的な、金色の服に身を包んで。

その日の夜は満月だった。
二人の布織職人が見た最後の満月。
翌日、二人のうちの弟子と称していた男は首をはねられた。

師と呼ばれていた男は裸にされ、二頭の馬で左右に引き裂かれた。

大人たちは、ある者は彼らを罵りながら、ある者は笑いながら、

彼ら二人の死に様を眺めていた。

私は、王様の着た美しい服が見えていたのに、見えないふりをした。

そして、その判断のおかげで、私も、私の家族も、街の一員に戻れた。

老人たちは、また聖書を誦んじてくれと頼んでくるようになったし、

パン屋の仕事も改めて頼まれるようになった。

私は喜んだふりをして聖書を語って聞かせ、

飴玉一個のご褒美に、子どもらしくはしゃいで見せた。

聖書を聞く老人に混ざって、自らの首を抱えた男が座っていた。

パン屋の窓の向こうには、体の裂けた男が立っていた。

私は、見えないふりをして生き、今や七十歳をこえた。

今こうして語っている間も、二人はそこで、私をただ無表情に見ている。

彼ら二人だけは知っているのだ。

私にだけは、見える、ということ。

恐怖？

彼らの亡霊につきまとわれて生きることは、さして辛くはない。

私は見えないふりが得意だし、何より亡霊たちは無害なのだから。

ただ、街の愚か者たちに囲まれて生き続けなければならないことが、苦しい。

内心で身悶えしながら、私はその有害な愚かさが見えないふりをして、愛想笑いを浮かべる。

こんな私をただただ見続けること。

それが、彼ら二人の復讐なのだろうか。